

序

ICUにおいてIntensivistが正しいと判断した治療や処置、手技、管理を継続していくうえで、ある一定頻度の合併症は避けられません。合併症のなかでも不可抗力のものや医原性と言わざるを得ないものまで幅広く存在します。合併症は当然ながらゼロが望ましいですが現実的にはそううまくはいきません。また合併症の結果として患者さんが被る不利益の程度もさまざまです。そのため医療安全や危機管理の観点からも重要なことは、生じ得る合併症に関して患者さんおよびご家族に事前に適切なICを施行しておくことです。合併症を強調しすぎて患者さん、ご家族に恐怖心のみを与えてしまうことは良くありませんが、患者さん、ご家族はもとより、われわれ治療する側の医療スタッフを守る意味からも適切な事前のICは必要不可欠で重要な問題と言えます。ときにはわれわれも全く予想できなかった合併症が生じる場合もあり、適宜適切なICおよび対応が必要になります。また、その対応も迅速さ、やスピード感が要求されます。

近年、集中治療医学を専攻する若手医師が増加傾向であり、看護師スタッフなども旺盛な知識欲、モチベーションを保持しています。彼らを納得させるエビデンスや参考文献の提示なども教育の観点からも重要になってきます。実際に合併症が生じた場合にはまずは実際に何が生じたのか、またその際に施行し得る最大限の対応は何かを当事者および責任医などを含めてチームで対応することです。集中治療はチーム医療であり、問題が生じた場合にも文殊の知恵ではありませんが多くの医師や各科の専門医なども巻き込んで相談することが重要です。また、同時にその状況に関して正確にカルテ記載を医師や看護師も行うことも重要になります。並行して患者さん、ご家族にも情報公開、共有をすることになります。

また、合併症という特殊な状況およびその性質などから、症例報告として通常の学術集会や論文などとして発表できない、あるいは発表しにくいケースも多いと考えられます。そのため一般論という形で、ICUではこのような合併症が生じている、生じ得る、ということを経ジデントの先生や若手医師、さらには各施設でIntensivistとして日々奮闘している先生方、ICUスタッフの皆さんにお伝えできればとの思いで本書が企画され、刊行に至りました。

今回は、ICUで集学的治療を行っていくうえで生じ得るメジャーからマイナーまでの合併症に関して経験豊富な全国のIntensivistの先生方に執筆を依頼しました。手前味噌と言われてしまえばそれまでですが、どの執筆者の原稿もすばらしく、感謝しています。練りに練られた原稿で、客観的な根拠やエッセンスも宝石のようにちりばめられていますので各執筆者の先生方の経験、執筆力、ICU力を御堪能ください。臨床経験が豊富なIntensivistはそれだけICU合併症などの困難な状況での経験も豊富といえます。読

者の皆さんの施設で経験していない合併症などは本書で疑似体験していただければそれに越したことはありません。また、これらを踏まえて、予防可能な合併症やリスクを軽減できる合併症に関しては可能な限りその努力をしましょう。近年の臨床医学は遺伝子分野の進歩に伴い「予防」というキーワードが重要視されています。少しニュアンスは異なりますが、集中治療においても「予防」の重要性は高まっていると思います。そのうえ、「予防」の方法や、どこまで「予防」するか判断も Intensivist には要求されます。日本の高いICU力をますます高めていくためにも防ぎ得る合併症を避けて患者さんの良好な予後につなぐお手伝いの一端を本書が担えることを願います。

最後になりましたが本書の企画，編集，刊行にあたりわれわれを叱咤激励していただきました羊土社編集部保坂早苗氏，谷口友紀氏，溝井レナ氏，編集部スタッフの皆様，およびご執筆いただきました各先生方には心より御礼を申し上げます。また，清水と萩原の両編集者の師匠である昭和大学医学部救急医学講座の三宅康史教授にも深く感謝申し上げます。

2016年 2月

萩原祥弘
清水敬樹